

備陽史探訪

第154号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(084)953-6157

神辺城と山名丈休

会長 田口 義之

南北朝時代、備後守護朝山景連によつて築かれた「神辺城」が神辺宿の北の町外れ、「古城山」にあったとすれば、今まで謎とされてきた『備後古城記』の次の記述は素直に理解できる。

神辺

紅葉山城、道上城とも

浅山備前守

建武二年十一月二六日城を築く

山名近江入道丈休

嘉吉三年八月四日城築

今までの記述は、朝山氏が築いた城を、山名氏が嘉吉三年に「再築した」と、と理解されてきた。しかも、神辺の郷土史家は朝山氏以降、備後守護は歴代神辺黄葉山城に拠り、備後を支配してきたと主張した。

だが、この考えは今や過去のものとなった。以前にも述べたように、備後守護山名氏は守護所を尾道に置いたことは明らかで、神辺に守護が居たという記録は何処にも残っていない。

戦国時代、この城に拠つて備後半国に号令した山名理興の存在から、山名氏がこの城を根拠に備後に号令したに違いないと、推測しただけだ。

山名近江入道丈休は実在の人物である。正しくは犬橋近江守満泰と言ひ、備後守護山名時熙、同持豊（宗全）の守護代として活躍し、山名氏の一族であったから山名近江守と呼ばれたのであろう。丈休はおそらくその法名である。

満泰の神辺黄葉山城築城は、山城の変遷と時代の要請に叶った出来事である。

「備後古城記」が伝える「嘉吉三年（一四四三）」は、將軍謀殺によつて起こった「嘉吉の乱」が首謀者赤松満祐の滅亡によつて、一応の終結を見た直後のことである。

「悪御所」として独裁的な権力を振るい、世の中を恐怖のどん底に陥れた將軍足利義教の「犬死」は、社会に大きな衝撃を与えた。巨大に見えた將軍権力が実は「張子の虎」にしか過ぎないことが明らかにされ、それまで將軍によつて押さえつけられていた諸勢力が、一斉に鎌首をもたげはじめた。

室町幕府は、將軍と守護勢力の「連合政権」的な要素を持っていた。將軍は守護家の勢力均衡の上に立ち、山名氏や大内氏のような突出した勢力を軍事的に押さえて（明德・応永の乱だ）権力を維持してきた。その將軍が守護によつて殺され、その守護もまた幕府軍となった守護勢力によつて滅ぼされたのだ。

いわば、それまでかろうじて維持されてきた社会の秩序がこの戦乱によつて根底から揺り動かされたのである。社会不安が一気に高まった。

ここに全国的に山城が再び築かれるようになった原因があった。備後守護、或いは守護代も同様であろう。今まで平地にあった守護所や古城山のような低い丘の上の城では、一朝有事には役に立たない。こうした状況の中で「神辺城」が黄葉山の山頂に築かれたのである。

おそらくは山頂を段々に削平し「曲輪」を築いただけの簡単な構造だったろう。だが、防御力は、それまでの古城山の城より格段に勝っていたことだけは間違いない。

◇◇◇

★五月五日に行った、「親と子の古墳めぐり」に参加された方から感想が届きました！

子ども達にとつて身近な歴史遺産にふれる絶好の機会になったようですね♪

こふんめぐり

うすい なおき

こふんめぐりをしてたのしかつたです。一番びつくりしたのが、イコーカ山こふんには、おはかがふたつあつて、びつくりしました。スベリ石こふんには、みちがスベルからスベリ石こふんとなすけられたのでしよう。本谷いちごうこふんは、むかして、てきがきたらいちごうの中に入つてみをもつたかのうせいがかたかいですね。ほくのめんどうをみてくれてありがとうございます。またあいましよう。

感想

村上 絵里花

子どもの日のこふんめぐりはとても楽しかったです。また行きたいです。

古墳探訪の感想

加茂町 大庭 東真(小4年)

午前中だけでも、二つの古ふんと二つの神社、一つのいせきを見ました。どの古ふんなどを見ても昔の人ががんばって大きな古ふんを作るために、くずれないように内がわに向かって少しなめにかべを作ったりと、たくさんのかぶを作った。住んでいる地いきのえらい人のためにがんばっておはかの古ふんを作った。すごいと思いました。来年もぜひ古ふんめぐりに行きたいです。

感想

山下 誼

今日はすごい楽しい一日でした。「たて穴式古ふん」と「横穴式古ふん」の中に実さいに入れて、うれしかったです。「スベリ石第一古ふん」が一番すずしかったです。山をのぼるのはたいへんで心配だったけど、

ロープをわたしたちのためにしてくださって不安がとれました。行けてよかったです。もっともっと古ふんを見て、はかせになりたいです。がんばります。

鑑真大和上と日本仏教

出内 博都

鑑真輪上は中国唐代の高僧、日本に渡来し律宗の開祖。唐の嗣聖五年(六八八)に揚州江陽県(江蘇省)に生まれ信龍元年(七〇五)道岸禪師より菩薩戒を受け、二十一歳の景龍二年(七〇八)長安實際寺の戒壇で南泉寺の名僧弘景を戒和上(受戒の師)として具足戒を受けた。その後長安・洛陽を巡遊して律・天台宗はもちろん諸宗を研鑽し、江蘇・安徽省方面で講律授戒を行い、四十歳には戒律の講座を開くこと百三十回、授戒の弟子は四万余人、一切經(一切の經を意味する)を写すること三部、古寺修復八〇余カ寺、諸州屈指の伝戒師と称せられた。当時唐の仏教界にあつては、僧尼になるためには具足戒を受けねばならず登壇受戒は出家の正門とされていた。具足戒とは僧尼が守るべき戒律の全ての事では比丘は二五〇戒・比丘尼は三四

八戒あるといわれている。

一方わが国においては平城遷都後、の社会不安・農民負担の増大による貧窮民の逃亡の中で国分寺建立の政策の中で、官寺を脱して民間で宗教運動をおこす行基に代表される民衆運動が広まり大仏開眼の為には「小僧行基」を「大僧正行基」にしなくてはならなかった世相の混乱の中で民衆の中で活動した「自度僧(私度僧)」が群出し、僧尼令に違反する僧尼が多く、先進仏教国の授戒制度、戒律研究の必要性が考えられた。天平五年(七三三)に遣唐大使多治比広成に従って入唐求法僧栄叡(ようえい)曾照・玄朗・玄法らが舎人親王の要請で伝戒師の招請にあつた。同八年副使中臣名代と共に来航したインド僧ボジセンナや洛陽大福先寺道(どうせん)はこの要請に応じた学僧であつた。栄叡・曾照は授戒制度には三師七証の十人の僧が必要なので同十四年に揚州大明寺の鑑真に日本への渡航を懇願した。その後鑑真一行の渡航は五回企てられたが、鑑真の日本渡航をこぼむ一派の妨害(第一・四回)や難破(第二・三・五回)で失敗に帰し、天平勝宝二年(七五〇)には栄叡が病没、鑑真も視力を失い、補佐役の祥彦も病没する悲運に遭遇したが、なお伝法

の志を貫こうとし、同四年に入唐した遣唐副使大伴小麻呂の第二船に乗って翌五年十二月、おりからの暴風波浪をしのいで薩摩国秋妻屋浦(鹿児島県坊津町秋目)に入港し翌年二月弟子法進・曇静・義静・思託らに随伴されて平城京に入り東大寺客坊に止住した。この間当時の高官名僧が再三にわたり十二年の苦難に満ちた労をねぎらい、勅使吉備真備も「自今以後、授戒伝律はもはら大和尚に任す」という孝謙天皇の意向を伝えた。四月に大仏殿前に臨設の戒壇を築き、聖武上皇・光明皇太后はじめ沙弥証修四百四十余人授戒し、後日大僧賢憬・忍基らの学僧八十余人も具足戒を受け、その翌年十月大仏殿西方に常設の戒壇院を造り唐禅院に止住して戒律の普及に尽力した。翌八年聖武上皇の病にあつては看病禪師の一人として医療に従い大僧都に任ぜられ、天平上皇元年(七五七)十一月備前国に水田百町歩を賜り、故新田部親王の旧宅地、平城右京五条二坊の故地を下賜され伽藍を建立した、この伽藍は同三年八月「唐招提寺」と命名された。朝廷は前年八月鑑真の身をいって大僧都の任を解き大和上の尊号を贈ったが同七年五月六日七十六歳をもって唐招提寺で入滅した。

鑑真大和上の生涯をかけての戒律の建て直しによって生き返った仏教は当分の間戒律授受の為に戒壇院を整備していった、東大寺では大仏殿西南に本格的戒壇院を建て、又唐招提寺にも建てられた。天平宝字五年

(七六一) 下野薬師寺(後年道鏡が配流される寺)と筑紫大宰府の観世音寺に設置され、天下の三戒壇といわれたが、平安初期に最澄は顕戒論で大乘戒を主張し比叡山に戒壇を建設しようとした。弘仁十三年(八二

二) 最澄の死後七日目に設置が勅許され天長四年(八二七)一乗戒壇院が建てられた。のち天台宗では山門と寺門(園城寺)が反目し園城寺が別立てしようとして永保元年(一〇八一)勅許を得て建てたが直ちに山門によつてこわされた。鎌倉時代に

なり遠国四箇国戒壇が、相模宝戒寺・肥後鎮興寺・加賀薬師寺・伊予等妙寺が建てられた。

こうして一時乱れた仏教界も整備され、神である天皇(天武天皇)がさらに上の三宝(仏)のやつこ(僧)になるという仏教立国の中で、厳しい戒律を克服して僧侶になれば身分も僧籍として別戸籍に編成されるのである。正倉院文書の中には草深い

神石高原町の住民、物部多能が勸籍の変更を申し出た文書があり、かな

り嚴重に勸籍がなされたことが知られる。その文書は次のように記されている(原文漢文)

「沙弥茲数啓」
謹んで啓しあげます。申す。沙弥等の勸籍を為す可き事について

沙弥茲数 備後国神石郡志麻郷戸主物部水海戸口多能

沙弥茲良 略
右件の沙弥等の籍恩沢を蒙り、其等の籍早速勸せん事を欲す、今事の状具申します、謹んで白し上げます。

宝龜五年三月十二日 (七七四年) 現在過疎化に悩む神石高原町にすら厳しい受戒を受けて僧籍を受けた者がかなり整備されていたことを示すものであろう。

あまのかぐ やま
天香(具)山
根岸 尚克

大和三山の一つ天香山は神であった。書紀の神武天皇即位前紀で、愈々大和に入って、国見の丘に即ち八十梟師有り。又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置く。復兄磯城軍有りて磐余邑に布き満めり。賊虜の拠る所は、皆是要害の地なり。故道路絶え塞りて、通らむに処無し。天皇悪計

給ふ。是夜自ら祈りて寝ませり。夢に天神有して訓へまつりて曰はく「天香山の社の中の土を取りて、天平瓮八十枚を造り、併せて嚴瓮を造りて、天神地祇を敬ひ祭れ。亦嚴呪詛をせよ。如此せば、虜自づからに平き伏ひなむ」と曰ふ。弟猾又奏して曰さく「倭国磯城邑に磯城の八十梟師有り。高尾張邑に赤銅の八十梟師有り。天皇を距き戦はむとす。天香山の壻を取りて天平瓮を造りて天社国社の神を祭れ。然して後虜を撃ち給え」と曰す。

国見の丘に八十梟師(多くの武勇の集団)が有り、女軍男軍を置いている。復兄磯城軍も有り、磐余の邑に満ちている。賊の拠る所は皆要害の地で道を塞いで突破出来ない。天皇はその夜神々に祈つて寝られると、夢に天神が現れて言われるには「天香山の社(延喜式神名帳に十市郡天香山坐櫛真命神社か)の土で瓮(皿)八十枚と神聖な瓮を造つて天神地祇を祭れ」と。弟猾が言う「磯城邑にも八十梟師有り。高尾張邑には赤銅の八十梟師有り(当時は青銅の時代だったがこの八十梟師の長は赤銅の甲冑を着けていたらしい)天皇の通行を塞ぎ戦おうとしている。天香山の壻で瓮を造り天社国社を祭り、その後には虜を撃ち給え」と。そして天皇は、椎根津彦と弟猾に卑しい老父

と老嫗に変装をさせて天香山の嶺の土を取りに行かせて、瓮を造り天神地祇を祭る。そして八十梟師を撃つ事に成功する。

ここで何故天香山の土でなければいけないのかという事である。敵中に変装迄して土を取って来ている。之は天香山が当時の人にとつて何かの理由で靈的な山に違いない。その事をさぐつてみた。

先代旧事本紀に「天香山尊」とある。之は天香山を神と見たものである。

万葉集に「天降り付く天之芳来山(二五七番)」とある。天降りつくは天から降りて取り着くの意で、万葉の時代に天香山は高天原から天降つた聖なる山と思われていた。歌手の安室奈美恵もアモルが語源である。鹿兒島県には天降川がある。「取り与呂布天香山」というのもある。ヨロフは鎧の動詞形で鎧を着けたの意で、甲冑を取り着けた軍神としての天香山で、銅剣を持った姿を詠んでいる。「天降就神乃香山(二六〇番)完全に香山は神であると詠んでいる。崇神天皇紀には、武埴安彦が謀反を起す兆候があると思われる折、妻吾田媛が密に倭の香山の土を取つて、領巾の頭に裏んで祈る。とある。

と老嫗に変装をさせて天香山の嶺の土を取りに行かせて、瓮を造り天神地祇を祭る。そして八十梟師を撃つ事に成功する。

ここで何故天香山の土でなければいけないのかという事である。敵中に変装迄して土を取って来ている。之は天香山が当時の人にとつて何かの理由で靈的な山に違いない。その事をさぐつてみた。

先代旧事本紀に「天香山尊」とある。之は天香山を神と見たものである。

万葉集に「天降り付く天之芳来山(二五七番)」とある。天降りつくは天から降りて取り着くの意で、万葉の時代に天香山は高天原から天降つた聖なる山と思われていた。歌手の安室奈美恵もアモルが語源である。鹿兒島県には天降川がある。「取り与呂布天香山」というのもある。ヨロフは鎧の動詞形で鎧を着けたの意で、甲冑を取り着けた軍神としての天香山で、銅剣を持った姿を詠んでいる。「天降就神乃香山(二六〇番)完全に香山は神であると詠んでいる。崇神天皇紀には、武埴安彦が謀反を起す兆候があると思われる折、妻吾田媛が密に倭の香山の土を取つて、領巾の頭に裏んで祈る。とある。

と老嫗に変装をさせて天香山の嶺の土を取りに行かせて、瓮を造り天神地祇を祭る。そして八十梟師を撃つ事に成功する。

ここで何故天香山の土でなければいけないのかという事である。敵中に変装迄して土を取って来ている。之は天香山が当時の人にとつて何かの理由で靈的な山に違いない。その事をさぐつてみた。

先代旧事本紀に「天香山尊」とある。之は天香山を神と見たものである。

万葉集に「天降り付く天之芳来山(二五七番)」とある。天降りつくは天から降りて取り着くの意で、万葉の時代に天香山は高天原から天降つた聖なる山と思われていた。歌手の安室奈美恵もアモルが語源である。鹿兒島県には天降川がある。「取り与呂布天香山」というのもある。ヨロフは鎧の動詞形で鎧を着けたの意で、甲冑を取り着けた軍神としての天香山で、銅剣を持った姿を詠んでいる。「天降就神乃香山(二六〇番)完全に香山は神であると詠んでいる。崇神天皇紀には、武埴安彦が謀反を起す兆候があると思われる折、妻吾田媛が密に倭の香山の土を取つて、領巾の頭に裏んで祈る。とある。

と老嫗に変装をさせて天香山の嶺の土を取りに行かせて、瓮を造り天神地祇を祭る。そして八十梟師を撃つ事に成功する。

大社が目につく。ここは寄ってお参りして境内を探索した。

夕暮れが近くなったので急いで三島駅に行く。ここで見送るが、その前に「せっかくだか家族に三島みやげを買って帰ったらどうですか！喜ばれますよ」と言うと「そうしよう」ということで名物の饅頭を買った。改札口で別れたが、お互いに名前も職業も名乗らなかったがこれでよかったと思っっている。今夜のホテルは駅前にあるアルファワンである。ホテルはなるべく分かりやすい場所にある駅前を選んでいる。便利もいいので好都合である。夕食はホテルのレストランでなく外で食べたが何を食べたか覚えていない。明日のコースは三島宿から吉原宿を目指す。



①箱根峠に向う旧道。江戸時代からの石畳道である。



④出征馬記念碑 戦場に行った愛馬は再び帰ってくることはなかった。



③下りは篠竹に囲まれたトンネル状の自然道がある。



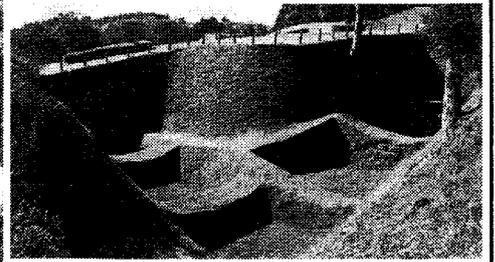
②国道の箱根峠頂上にある標示。ここから静岡県となる。峠の高さは846mとなっている。



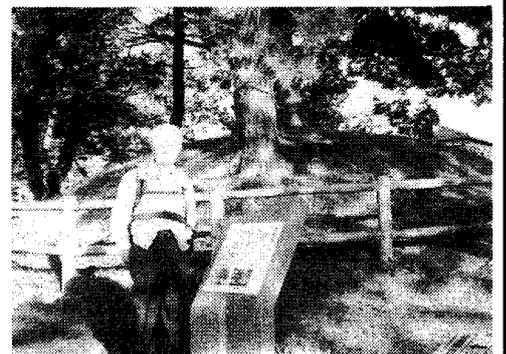
⑦三島に下って行く道から常に見えていた富士山の姿。



⑥杉木立の中を行くが、小田原側の東坂より明るく歩きやすい。



⑤北条氏の山城だった山中城 秀吉軍の大軍に囲まれて半日で落城した山中城址。堀障子のようによく分かる。(写真はガイドブックから)



⑧錦田の1里塚 当時のままの円い塚に樹木も残っている。国指定である。

東海道五十三次

ゆったり歩き紀行(7)

三島宿から吉原へ

岡田 宏一郎

十月二十日(火)ようやく箱根の坂を下ったので気をよくして三島駅前のホテルアルファプラスを出発する。本町通りの問屋跡は現在、中央郵便局になっている。

世古本陣跡は小さな碑があり樋口本陣跡はお土産屋になっていて、ここにも跡を示す碑がある。これらを賑やかなアーケード商店街を通って見ながら進む。

広小路駅のそばに三石神社がある

ので狛犬を見るため立ち寄る。関東では怖い顔をした狛犬が多く、ここでは注連縄が頸に掛けられていた。

三島は壬申の乱後、伊豆国の国府が置かれ、平安後期には三島明神が遷宮され、三島大社として栄えていく。江戸期になると箱根八里を控え宿場町として賑わった。

町中にはいたるところに富士の湧き水が出ており、その清冽な湧き水はそのまま飲みたくなるほどきれいな水で「福山の芦田川や神辺の高屋川とは大違いだな」と思い、水草が揺れる柿田川や公園の湧水池を見つめていた。

市街地を過ぎると復元された宝池寺の一里塚があり、それを見て狩野川に沿って進む。途中長沢八幡神社がある。ここで源為朝と義経の兄弟が対面し、その時腰掛けたという伝説の対面石があったのだが、またまた通り過ぎてしまった。惜しいことした。

狩野川を過ぎると沼津市街地にはいつていく。道は狩野川に沿って曲がって行く。

永代橋で直角に折れて東海道本線に並行して真っ直ぐ進む。

このあたりからも頂上付近に雪が積もった美しい富士の嶺がよく見え

る。

永代橋のすぐ近くに乗運寺があって、ここに若山牧水の墓がある。牧水は砂浜海岸の千本松原の伐採に反対し阻止している。

若山牧水の「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」は好きな句である。

東海道はJRの鉄道線に並行しており、美しく湾曲した砂浜海岸に沿った千本松原を見ることは出来なかった。

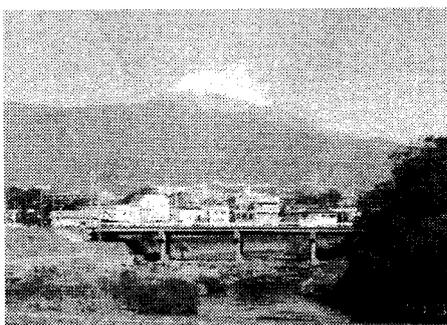
沼津駅前の城岡神社境内に「沼津兵学校跡の碑」がある。住宅地の道を行くと住宅の庭先に傍地石が立っていた。その道標には「従是西 沼津領」と刻まれていた。沼津の郊外を進み東海道線を越え北側の道を進むとすぐ原宿駅に着く。

そこから単調な道をまっすぐ行き、東田子の浦駅手前で道は東海道本線の南側になる。このあたりの海岸が山部赤人の和歌で有名な「田子の浦ゆうちいでて見れば白ぞ富士の高嶺に雪はふりける」の田子の浦海岸である。

そこから工場地帯を進むと吉原の市街地には入り、東海道本線を北側に渡るとすぐ吉原駅前が出る。今日は二十二キロ程の行程であった。



住宅地の中に石碑があった。これより西は沼津領となる。



沼津の途中に美しく見えた富士山。このあたりは富士山を見ながら楽しく歩いた。



三島大社の門前で1枚パチリ。写してもらった。

没落の謎

小林 定市

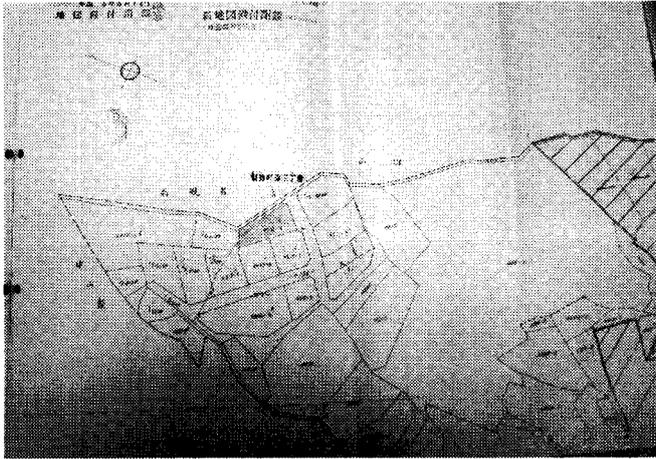
一、長州の渡辺氏

室町時代から戦国時代の初期に、備後守護山名氏から備後国沼隈郡草戸(草土千軒を含む)の代官(領主・守護山名氏)に登用され、山名氏の実権が備後から失われた後は草戸を見限り、実力で山田郷(福山市熊野町)に移って行った渡辺氏がいた。

その渡辺氏も、関ヶ原合戦後は毛利輝元に従い長州に移住したのであるが、知行高の縮小から渡辺四郎右衛門景(出雲守・穆庵)は嫡男の渡辺佐渡信を長州に残し、二男・三男を連れて頼に帰り後に水野家に仕えた。今回は長州に残った渡辺佐渡信の系統が、信のあと常・宣・繁・直・茂と続くのであるがその間に没落した経緯を追求してみたい。

長州藩に於いては、享保五年(一七二〇)から門閥家の調査に着手し六ヶ年を経て、同十一年に『萩藩閥閥録』を完成させた。所収された諸家数は千二百四十四家に及んでいたが、何故か山田郷の渡辺家は『閥閥録』に収載されていなかった。

備後渡辺氏の毛利家に対する、長年の忠節と貢献年数を勘案しながら



ある。

引野誕生の一つの伝承として、今では貴重な伝え話となった。

話を聞いた長老の生存時は、この話を公にすることに賛成ではなかったことをここに記しておく。多分史実かどうか判らない伝承に基づく話なので、ということだろうと思う。しかし、地名も古墳も現存していることを注目すべきであろう。今回「引野・長浜の歴史と文化財」という冊子を発行したのを機にこの話を思い出し、現地を探訪したのでこのメモを作った。

奈良まち紀行

坂井 邦典

平成二十二年三月十四日(日)

五時十六分、福山駅発にて出発した。参加者二十一人。春の時刻改正で電車が無くなることを心配したが変化がなかった。

元興寺の旧境内を中心とした地域を「ならまち」と呼んでいる。南都と呼ばれた社寺のまちから、商業のまちへ、それから観光のまちへと、様々な時代背景の中で、盛衰をくりかえしてきた町である。本日はこの「ならまち」を見学する予定である。十時十三分、奈良駅着。駅は現在改装中で、今迄より随分と広くなっている。

駅前商店街に入り、一〇分も歩くと左手にある、
春日率川坂上陵(念仏寺山古墳)

人皇第九代、開化天皇陵に比定されている。周濠を有する全長約百mの前方後円墳である。工事の発掘調査で江戸時代は民間の墓地であったといわれているとおり、同時期の骨つぼの破片や寛永通宝が見つかった。幕末、文久の修陵の際に天皇陵として、前方後円墳の体裁が整えられたともいわれている。なお、五

世紀ごろの埴輪片も出土したといわれる。

勿論、こういう名の天皇の存在は疑問であり、この古墳の時代とも違っている。

道路の入口に「開化天皇川上陵」宮内庁と書いた立看板が立ててあった。しかし御陵の柵の中に立ててある石柱には「開化天皇壘川坂上陵」と書いてある。どうして異なった名前なのか。「宮内庁の役人よ、しつかりせよ」といいたい。

漢国神社

読み方に注意が必要である。推古天皇時代に始まるという。県社。園神として大物主神、韓神として大己貴命、少彦名命を祀る。韓神の韓が漢に、園神の園が国となって、神社の名になったという。

林神社

漢国神社の境内摂社で、林浄因命を祀る。饅頭の神社である。林浄因は中国人で暦応四年(一二四〇)来日して漢国神社内に住み、我国で最初に饅頭を作って好評を博した。後村上天皇に献上し、そのほうびに宮女を賜ったという。現在も全国菓子業界の信仰を集めていて、年一回、饅頭祭が行われる。

率川神社

正式な名は率川坐大神御子神社と

いう。大神神社の境外摂社である。明治時代まで春日大社の摂社であったのが、論争の末、明治十二年、大神神社のものに決まった。

推古元年(五九三)に始まった。祭神は玉櫛姫命(向かって右殿、母神)、媛蹈鞴五十鈴媛命(中殿、御子神、神武皇后)、狭井大神(向かって左殿、父神)である。

通称を「子守明神」という。これは社殿が父神、女神、母神と子供を見守るように並んでいるからで、安産、育児、息災延命の神として有名である。

さらにこの神社の境内に三つの並んだ神社がある。一御殿(東端)に率川明神、二御殿(中央)子守明神(率川阿波神社)、三御殿(西端)に住吉明神が祀つてある。

神社名の率川というのは、この場所の近くに率川という川があるからである。現在は暗渠になっているから神社付近では見ることが出来ない。

三枝祭

この率川神社で毎年六月十七日に行われる。百合祭ともいい、本社のある三輪山に咲いたユリの花(三枝の花)で酒樽を飾り献することから、この祭名になったという。巫女たちが百合を手に神楽を舞うのが祭のハイライトである。

采女神社

猿沢池の西端に沿った小祠である。春日神社の境外末社である。祭神は事代主命であるが、一説に采女という。采女というのは天皇に仕える官女で、地方の豪族の娘か妹（美人が条件）を天皇に献上するのである。

この采女が天皇の寵愛が薄れたのを嘆いて猿沢池に入水したとの伝が「大和物語」にある。しかし悲しむことは無いのだ。街の中に掲げてあった、この神社の案内の看板には「縁結びの神」と大きく書いてあった。それも赤い字で。

この社殿の特徴は鳥居に対して反対向きに背を向けて建っている。すなわち鳥居は猿沢池の方に向いて建ててあるが、社殿は池の反対方向、すなわち西を向いて建っている。

また福島県の郡山市にも「郡山うねめ祭」がある。郡山の古地名である安積と大和の地は、古墳時代より交流があり、采女伝説が残っているらしい。このことから奈良市と郡山市は姉妹都市になっている。

興福寺

法相宗の大本山である。藤原鎌足と息子の藤原不比等ゆかりの寺院で、藤原氏の氏寺である。鎌足夫人の鏡王が夫の病氣平癒を願い釈迦三尊像を本尊として天智八年（六六九）山背

国に創建した山階寺が起源である。

和銅三年（七一〇）、藤原不比等が現在地に移し「興福寺」と名付けた。

その後、寺運は隆盛となり最盛期には付属寺院が一〇〇院以上も建てられたという。しかし兵火などによる度々の火災にみまわれ、現在は東金堂、中金堂、五重塔、三重塔、南円堂、北円堂のみとなっている。

五重塔

天平二年（七三〇）、光明皇后の発願で創建された。現在のものは応永三三年（一四二六）ごろの再建である。高さ五〇・八mで京都の東寺に次ぎ、

日本で二番目の高さである。この工芸が受けつがれて無くならないことをこい願うものである。

明治一年（一八六八）神仏分離令施行（廃仏毀釈）の時に、この五重塔が

わずか二十五円で売りに出された。商人が買って最初は壊して薪にしようとした。しかし壊すには大変な労力が要るとわかって、金目の金具だけでなくも取ろうと考えた。それには焼いて後の金具を拾えばよいということになった。しかし附近の町家から、

火が飛んで大火事になったら困ると抗議が出たので商人は買うのをやめた。その結果、幸運にも五重塔は残ったのである。

三重塔（国宝）

崇徳天皇の中宮皇嘉門院により創建された。現在のものは治承四年（一一八〇）再建である。

これは余談である。

崇徳天皇は平安末期（一一一九～一一六四）、第七十五代の天皇で、わずか五才で天皇になり、二十三才の若さで父の鳥羽上皇から自分の弟で、わずか三才の体仁親王に譲位を強制させられたのである。実は崇徳

は鳥羽の子ではなく、祖父の白河法皇と鳥羽の妻（中宮の待賢門院璋子）との間に生れた不倫の子であった。白河というのは後三条の後を継ぎ、

十五年の在位の後、上皇となり三十四才から崩御まで四十三年間にわたり、法を無視して自分の意のままに院政を行った人である。

このことを知った鳥羽は崇徳を嫌い、だまして本当の自分の子、体仁親王（近衛天皇）に位をゆずらせたのである。ところが近衛は十七才で

若死してしまったから大変。近衛の死は崇徳の呪詛によるものとのざん言を信じた鳥羽は怒り、鳥羽と待賢門院との間に出来た子で、崇徳の弟雅仁親王をたてて後白河天皇としたのだ。

崇徳は自分が天皇に復位するか、または自分の子の重仁親王が即位するものと思っていたために、反乱を

決意した。左大臣藤原頼長、源為義らを配下にして政権奪取を試みたのだ。これに対して鳥羽上皇が平清盛、

源義朝らを味方につけて戦ったのが「保元の乱」（一一五六）である。そして戦に敗れた崇徳は讃岐に流された。

崇徳院は都に帰ることなく、怨念を抱いて「大魔王となり天皇家を没落させてやる」とのろいの言葉を言い続けながら憤死したのである。坂出市の稜松山白峰寺（四国八十八ヶ寺第八一番札所）に御陵が現存している。

はなはだしく後の世になるが、明治天皇は即位に際して崇徳院の怨念をおそれて京都市今出川に白峯神宮を建立して祀り鎮魂を願ったのである。

ちなみに待賢門院璋子は六人の子供を産んだという。

これはさらに余談である。

十五才の時から白河法皇の寵愛をうけていた藤原公実の娘璋子は十七才のとき、法皇により二才年下である十五才の鳥羽天皇の中宮にさせられたのである。しかるに法皇は自分の子を産んでもらいたくて妊娠しにくい日に天皇との情交を受け入れるよう知恵を璋子に授けた。そこで中宮は月のさわりの期間は天皇の側に

おり、終ると法皇との密会の場合で過ぎた。そしてまちこがれる天皇を璋子は法皇から教えてもらった方法を、あたかも部屋の中で見聞しているような表現で小説に書いているのだ。この作者は札幌医大出身の医師渡辺淳一氏である。現在、文芸春秋の中に「天上紅蓮」という題名で連載中である。

南円堂(国宝)

光明皇后の発願で創建された。現在のものは江戸時代の寛保元年(一七四一)ごろ再建の八角円堂である。

北円堂(国宝)

養老五年(七二二)長屋王が藤原不比等追善のため造営した。現在の堂は承元二年(一一〇八)再建の八角円堂である。

東金堂(国宝)

聖武天皇が伯母の元正太上天皇の病氣平癒を願って創建された。現在のものは応永二十二年(一四一五)再建されたものである。

中金堂

和銅三年(七一〇)藤原不比等の創建という。現在の堂は文政二年(一八一九)に再建された仮堂である。

宝物館

館内に東金堂、中金堂、南円堂、北円堂の中に安置されていた国宝、

重文の仏像が収納展示されている。**植桜楓の碑**

興福寺への石段を上ったところにある。碑には奈良奉行や大阪奉行をした人の名が十数人羅列してあった。

その中の一人、川路聖謨がこの附近に桜と楓を約四千本植えたという事蹟を難解な文章で書いてあるので時間をかけながら読んでいたら、六〇〜七〇才くらいの人が近寄ってきて、

川路のことを市長や市会議員が知らないから教えて、この碑を作らせたのだという。そこで小生が「ご教示下さり有難うございました」と言ったら、我が意を得たりと喜んでくれた。

川路(一八〇一〜一八六八)は豊後日田の生まれで、幕末に勘定奉行や外国奉行などになった人で、江戸開城の事を聞いて自殺したのである。勝海舟、小栗上野介忠順や榎本武揚らと同列の有能な人物であったという。

元興寺

蘇我馬子が崇峻元年(五八八)、飛鳥に建立した法興寺が平城京遷都により現在地に移転して元興寺となった。そして飛鳥の地にとどまった法興寺は現在の飛鳥寺になっている。

奈良では東大寺、興福寺が勢力を増してくるにつれて、元興寺は平安時代から次第に衰退して、寺域を縮

小し、伽藍の再建もなく、現在は元興寺極楽坊の本堂と禅室の建物のみとなっている。

また元興寺文化財研究所が境内に設立され、仏像の研究や解体修理など行っていて有名である。

極楽坊本堂(極楽堂・曇荼羅堂)(国宝)

寄棟造で、正面の中央に大きな柱が来ているのが珍しい建て方である。

鎌倉時代の寛元二年(一一四四)改築した。また行基尊という名の特徴のある屋根瓦が葺かれている。本堂と禅堂の屋根に数千枚が使用されている。奈良時代に瓦博士の造った日本最初の瓦だという。本堂と禅室の屋根の一部に使用されているのが、本堂の裏側の場所から見るとよくわかる。

禅室(国宝)

切妻造。僧坊であったものを寛元二年に改築した。法隆寺よりも古い敏達天皇十一年(五八二)に伐採された日本最古の木材が使用されているとのことである。

元興寺収蔵庫

中に国宝の高さ五・五mの元興寺五重小塔がある。これは創建当時の西塔そのものといわれ、奈良時代の作で内部構造まで省略せずに造られている。その他に仏像や文書などが

展示してある。

これと同じ様な五重小塔を見た覚えがあるのに、どうしても思い出せない。ボケる年になったと嘆き苦しんだ結果やっと思いついた。海龍王寺(法華寺の隣にある寺)にあったのだ。

五重小塔(国宝)

高さ四・〇一m。奈良時代前期の作で、平安時代と鎌倉時代に大修理をしているが、創建時の木材が残っている由。

旧大乘院庭園

興福寺の門跡寺院である大乘院の庭園である。大乘院は明治の廃仏毀釈により、廃寺となったが庭園は残り国の名勝に指定されている。現在は復元工事中で庭園内に入れないが、庭園に接して建っている大乘院庭園文化会館より、腰掛けて疲れた体を休めながら見学した。池にかけられた真赤に塗られた小橋が印象的であった。

奈良町資料館

いづれも伝統的な町家を修復改造して、昔懐かしい各種民具、仏像、古銭、その他の美術品や民俗資料が展示してある。入場無料で公開している。また、まちづくりに関わる人が交流し、まちづくりに関する情報を発信している。中に直径一m近くもある有田焼の大皿が三枚もあり驚

いた。また、明治、大正、昭和の有名な文豪の原稿が多数展示してあった。これは本物かコピーか、遠方から眺められるだけなので定かでない。このほかペンダントなどの小細工物や土産物などの販売もしている。

元興寺塔跡

安政六年(一八五九)に焼失した塔跡の基壇と礎石が残っている。その遺構より見ると、塔の一辺は九・八五mで東寺五重塔より大きい塔であったらしい。

元興寺小塔院跡

小さな門をくぐって入った路地の奥にあった。現在は江戸時代に建てられた虚空蔵堂(仮堂)である。小さな堂で民家様の建物とひつついてその建物と一体になっているように見える。この裏の狭い場所に、相輪の上半分が欠如している一八三。の宝篋印塔がある。これは護命律師(天平時代の人の墓というが、この塔は典型的な大和式で鎌倉時代のものであるから、時代が違うので供養塔と考えられる。

隣に円柱状の和尚さんの墓が並んで建っている。関係があるのだろうか。

庚申堂

なら町の中心にあり「庚申さん」と呼ばれている。青面金剛像を祀る

小祠である。青面金剛の使いの猿(申)をかたどった独特の形をしたお守で、魔除けとして町内の家の軒下に吊るされている。大きいのが大人、小さいのが子供とされ、その数は家族構成に合わせて吊るされているのである。数多く吊るせば景気がよくなって金持ちになるということではないのだ。

町内の住民の災いを代わりに受けることから「身代わり猿」と呼ばれ、また背中に願い事を書いて吊るせば願いが叶うとされ「願い猿」とも呼ばれている。

猿が毛づくろいをしている姿が「三戸の虫」を食べている格好に見えたので、三戸の虫が恐れて逃げたという。三戸の虫は悪業や災難を持つてくる虫であるという。またこの虫は「コンニャク」が嫌いだからコンニャクを食べると退治できるという言い伝えがある。

毎年三月の第二日曜と、十一月二十三日に「庚申まつり」が行われ、参拝者に大根とコンニャクの田楽がふるまわれる。

ならまち格子の家

奈良町の伝統的な町家を再現している。町家は間口の幅で課税されたので、うなぎの寝床状に細長い、すなわち横に細く奥行き長い建物で

ある。また表通りに面したいという知恵でもあるといわれている。建物の正面は格子窓となり、通風がよく、表通りから中は見え、中から外が良く見える目隠しの役割を果たしている。二階の部屋は天井が無く、小屋梁がむき出しの状態である。薪を燃やした煙が屋根の煙抜きに抜ける、箱階段、小さく美しい灯籠のある坪庭など限られた土地や空間を十分に生かすよう工夫された造りになっている。

なら工芸館

工芸家の作品展示室、工芸に関する書の閲覧室、工芸教室(一刀彫や墨作り)の研修室があり、奈良工芸である漆器、一刀彫、赤膚焼、乾漆、古楽面、筆、墨、奈良晒、鹿角細工などが展示してあった。また一刀彫の製作道具一式があった。こんな沢山の道具を使い分けて使用することに驚き感心した。

二二時三三分、福山駅着。一同元気に帰宅した。

今迄に奈良へは何度も行ったが、いつも町の中は素通りしていたのだ。

今日は一日中快晴無風温暖の天候にめぐまれ、「ならまち」をゆっくり歩いて心ゆくまで探訪見学し、満足した次第である。「ならまち」見学の計画と現地説明をして戴いた平田

さんに深く感謝いたします。



「湖東・明智光秀伝説の城」探訪

末森 清司

城跡探訪は、戦国大名、大豪族が築城居城した有名城跡を探訪するのも楽しいが、一地方の山村にひっそりと隠された伝承とそれを裏付ける遺跡が残った史跡や城跡を探訪するのも嬉しいものである。

早春の一日、懇意にしている米原在住の中世城郭研究者、長谷川博美先生(滋賀県民俗学会理事・近江中世城郭調査会会長)、泉良之城歩会会長(郷土史・中世城郭研究者)のお二人が発見、調査発表した「滋賀県犬上郡多賀町左目」に伝わる伝説と。それを裏付ける山城の探訪に参加した。

長谷川先生の資料内容の地元伝承も面白く興味深い。

(なんじゃって、明智一族が多賀に居住していた……?!)

地誌「近江興地志略」(一七二三・一七三三)「佐目村畑地、明智十左衛門、生国美濃を立ち退き、土岐氏を

背き此地に來たり居住す。佐々木六角高頼扶助しおけり、十左衛門子十兵衛光秀越前へ立ち越え朝倉に從つし後、信長に仕え立身し、後に逆意を企て、主君信長を弑し、秀吉に殺さる」

※畑とは畑作を生業にする江戸時代の湖東の山間集落の呼称。

(長谷川先生資料より)

今でも明智一族が居住した地所があり地元では「十兵衛屋敷」と言われ、当時使用された井戸が残る。

光秀が此所を出立する時祈願した井戸とも伝えられている。

屋敷跡の近く十二相神社の境内には、宝篋印塔、一石五輪塔、石仏がひっそりと祀られてある。

これらの石造物、近くの犬上川に捨てられていたものを近年引き上げて此所に祀ったとの事。ワシは石造物の知識はないが一見して優れたものと見受けられる。これと同じものが今でも犬上川に残っていると地元の人々の証言あり。

(?なんじやってこぎやあな優れた石造物が川に捨てられたんじや。明智一族又は縁の人達の供養塔や墓なんか。宝篋印塔、一石五輪塔は故意に破損され捨てられたように思うんじや。それにしても立派な石造物じやのう。破損してなかったらなのう…。

ウーン調査すると面白いじやろうのう……)

伝十兵衛屋敷の裏山に城跡がある。

この地の一土豪が築城したのか、明智一族や村人が築いたのか伝承は残っていない。

見上げると鈴鹿山系に連なる一山稜の険しい山(標高四二五m、比高一七〇m位)。

ワシは高所恐怖症で急坂、長い階段の登り下り、立橋、馬背尾根を歩くのが大の苦手で肝が縮み足が震み、歩行困難状態の有様だったが、仲間十余人が居るので一安心、へっぴり腰で登山する。

北伊勢と近江湖東の国境に近い村落の一土豪が築いたと思われる小さな山城。縄張遺構は期待してなかったが、狭小な尾根上の見張曲輪に立つとそこから連なる土塁、曲輪群、犬走り、帯曲輪の構造に目を見張った。冷汗をたらして登った甲斐は充分あった。(以下次号へ)

(補記)光秀伝承について文献を県立図書館で調べた。『淡海温故録』(一六八四〜一六八七)『近江輿地志略』(一七二三〜一七三三)『木近江木間攷』(一七九二)の三地誌に記載あり。

(長谷川先生資料に記載されておりました通りでした)

能「八島」から

壇ノ浦と檀ノ浦

種本 実

地名の「だんのうら」と言えば、山口県の壇ノ浦を思い起こすが一般的だろう。ところが、四国の高松市にも檀ノ浦という地名があることを最近知った。

同好の方々と能楽を学んで数年になる。源平の合戦を題材にした作品は数々あるが、中でも「八島」は私の好きな作品のひとつである。観世流では「屋島」と表記する。

高松市の屋島は、小学校六年生の修学旅行で、ケーブルカーに乗って山頂まで登った記憶がある。源平の時代には海中にあって、八島と呼ばれていたらしい。

当時の「高松」は屋島の内陸部であり現在は「古高松」と呼ばれている。戦国時代の終わり頃、天正十五年に讃岐を領した生駒氏が、城を築き、以後、城下町として発展したのが現在の高松市の中心部である。

能「八島」は、平家追討の命をうけた源義経が、一の谷から讃岐の高松に入り、八島を臨むこの地で、平家の陣を果敢に攻めた合戦の一コマ

を描いて、義経の武勲を表わすのが主眼となっている。

前半のあらすじでは、

都の僧が、西国行脚の途中に四国の八島の浦へやって来た。すでに日暮れ頃、釣竿を肩にした老翁と若い漁夫が通りかかったので、僧が一夜の宿を乞うと、老翁は「家が粗末なので」と断わるが、僧が都の者と知るとたいそう懐かしがり、中へ入れる。老翁は、旅の僧の求めに応じて八島での源平合戦の模様を物語る。という展開である。

私が「八島」の中で謡と舞いを習ったのは次の部分である。

「今日の修羅の敵(かたき)はたそ、何、能登守教経とや、あら、ものものし、手並みは知りぬ、思ひぞ出づる壇ノ浦の、其の船軍(ふないくさ) 今のはや、其の船軍 今のはや、閻浮(えんぶ)に帰る生死(いきしに)の、海山一同に震動して、船よりは関の声、陸(くが)には波の楯、月に白むは剣の光、潮(うしお)に映るは、兜の星の影、水や空、空、行くもまた雲の波の、打ち合い 刺し違ふる船軍の駆引、浮き沈むとせし程に、

春の夜の波より明けて、敵と見えしは、群いる鴉、関(とき)の声と聞こえしは、浦風なりけり高松の、

浦風なりけり高松の、朝風とぞなり
にける」

謡の中で、私が気になっているのは「思ひぞ出づる壇の浦の 其の船戦今ははや」という詞である。八島の浦での合戦を物語る最中に、なぜ、長門の壇ノ浦が表現されるのだろうか。

八島の戦いは寿永四（一一八五）年の、二月十九日から三日間であった。壇ノ浦での戦いは同年の三月二十四日である。この最後となった戦いの最中に、劣勢の、平氏の船中に在った八歳の安徳天皇は、三種の神器や大勢の女官たちと共に入水したのである。

要するところ、八島の船戦を回想する中で、壇ノ浦の合戦を思い起こすことは、時間的に矛盾を感じる。その矛盾を紐解こうと、調べてみて次のようなことが分かった。

端的に言えば、「壇ノ浦」と「壇ノ浦」の違いである。「壇ノ浦」といえば、山口県の下関海峡の中で最も狭い水域をさし、また、高松市の屋島の西の入り江を「壇ノ浦」というのである。

したがって前述した謡の中の「壇の浦」は、「壇ノ浦」ではないだろうか、と私は思う。もちろん断定は

できない。「八島」の作者の世阿弥は、源平最後の合戦となった本州西端の、「壇の浦」の船戦を「思ひぞ出づる」としたのかもしれない。「壇ノ浦」とする説では、謡の中の「群いる鴈」は、屋島の西に「牟礼（むれ）」という地があり、「牟礼の鴈」が「群いる鴈」に転化したのだろうかという。

四国と、本州の西の端の二つの地に、「だんのうら」という地名が存在することは、ほとんど知られていないのではないだろうか。私も能を学んでいなかったら、このことを知る機会はなかっただろう。

屋島には八百年前の合戦にまつわる史跡が多く残っている。その数箇所を紹介してみよう。

安徳天皇社は、安徳天皇の「行宮（あんぐう）」、すなわち飯の皇居の跡である。この付近には、石塔が数十基あり、その数多くが平家の将兵の塔だという。石塔は風化がはげしく、八百年前の昔をしのばせているようだ。

義経は合戦の最中に、どうしたとかか弓を海中に取り落としした。彼は海中の馬上でうつ伏せになり、鞭でかき寄せるがなかなか拾えない。周囲の者が止めたが耳を貸さず、ようやく拾い上げた。これは、平家に拾われて、「源氏の大將ともあろう者

が、こんなに弱い弓を使っているのか」と、物笑いになるのを怖れたものだと言われている。この弓流しの場所も陸地となって「義経弓流シ」の碑が建っている。

「祈り岩」は、那須与一が「扇の射よ」と命ぜられた時、波は高く、船は揺れ、扇も落ちつかず揺れている。与一は「南無八幡大菩薩、別しては、我が国の神明、日光の権現・宇都の宮・那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真中射させてたばせ給え、これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かうべからず。今一度、本国へ帰さんと思し召さば、この矢はづさせ給うな」と祈った所という。

一方の下関の壇ノ浦には次のような史跡が知られている。

中国縦貫自動車道の、関門橋の真下に位置している、「みもすそ川公園」には、「壇ノ浦古戦場」の碑が建ち、「安徳帝御入水之処」の碑、平知盛像や、源義経「八艘飛び」の像なども設置され、海峡の記念写真のスポットとなっている。

安徳天皇は、二位の尼にいだかれながら、三種の神器のうち、剣とまが玉とを持ったまま、波の下の都へ向かったという。

剣は天叢雲（あめのむらくも）の

剣といつて、スサノオノミコトが出雲国で討った、ヤマタノオロチの尾から出てきた剣と伝わっている。当時、源氏と平氏を巧みに操りながら権勢を握っていた後白河法皇は、海峡をくまなく探させたが、どうしても見つからなかったという。

二位の尼とは、平清盛の正妻で墓所は赤間神宮にあり、毎年五月二日に、平家の子孫らで組織される「全国平家会」の参列のもと、一門追悼祭が齋行されている。

赤間神宮は下関市内にあつて、平家一門を祀る墓があり、「耳なし芳一」の舞台としても知られている。能「八島」に謡われた、「だんのうら」から発して、高松市と下関市に伝わる源平の古跡を、改めて学ぶことができた。

春日神社、一一五〇年を迎えて

後藤 匡史

平成二十二年（二〇一〇年）春日神社（大分市勢家町四丁目）が創建一一五〇年を迎えた。そして大分市歴史資料館職員小瀬美鈴さんと私と同じ伝統文化ボランティア調査員の是永辰美さんと三人で旧勢家本町界隈をマップ作成のため歩いた。

幕藩体制の旧柞原街道を歩くコ

スで、柞原八幡宮その下宮、浜ノ市がある。

浜ノ市とは、平成元年（三月十九日）備陽史探訪の会三月例会、末森氏と御調八幡宮と久井町の史跡巡りで担当した時、稲荷社境内資料館に、西日本三大牛馬市（鳥取の大山市、御調郡久井市、そして大分市浜ノ市）の説明があったあの浜ノ市である。

貞観二年（八六〇年）第二十五代豊後国司、藤原朝臣世数公が春日神社を勧請した。

藤原朝臣山陰卿政友公、南都（奈良）より随員七名をここに置く。

我が後藤家始祖、曾煥大夫、勢家氏、池永氏、仲西氏、藪部（長谷）氏、脇氏、命婦氏である。

勢家本町小唄

後藤 匡史作

一、森が広がるこぼれ陽の

春日神社のおひざ元

勢家界隈家並みの

こは本町表参道

二、本町通りを東から

西に向かって曲り道

風が優しく肌を掃く

ここは金ん手憩道

三、明るい日差しは南から

折る御仏の響あり

朝な夕なの寺参り

ここは真宗法専寺
四、安甫の小路の路地行けば
軒が連なる新道と
蓬萊山へと続く道

ここは豊久道はるか

後鳥羽上皇伝説紀行

俳句歴若葉マーク

鳳輦の 往きし時に 桜散る

幾世紀 変らず咲きは 山桜

仰ぎ見る しだれの天蓋 空を覆う

萱葺きの 歴史を秘めて 春野萌ゆ

春光の 大黒柱 煤黒に

(番外)

つくし摘む 媼の聲の若々し

(お願い) 私はこの度、初めて俳句

というものを投稿しました。愚妻の

申すには「どうも俳句として何か物

足りない、「ハイ9」でなくて「ハ

イ6」ぐらいでは……」とのこと。

諸先輩のご指導を受けたいと思いま

す。匿名で結構でございます忌憚の

ない酷評をお願いいたします。

ご意見は藤井事務局長宛にお送り

ください。私の方へ届くようにお願

いしております。宜しくお願いいた

します。

俳句

住田 保夫

○四月例会後鳥羽伝説紀行

― 県北 吉舎、高野、比和、

三良坂方面―に参加して

道中

朝日射し稲荷歌々風光る

やまつつじ山ごめ川の水鏡

風なくて日すがら尾の垂る鯉職

バスの窓一斉いまや芽吹山

県北や早も水張る春田人

町囀聴かず顔前土筆摘む

学校のグラウンド見下す花万朶

野焼跡路辺の土筆や伸ぶるまま

神社

享保期の掲ぐ繪馬堂朝桜

天を突き芽吹く巨銀杏繪馬堂主

ぬかづけば社叢の中の春の声

しめ縄のくづれし鳥居過疎の春

春鎮守神木果てし大うつろ

社叢の奥咲いて三極灯を点す

寺院（しだれざくら有名）

みぎひだり磴を蔭はん枝垂花

瘤々の幹や威厳よ糸ざくら

楼門の髪状如き滝桜

みほとけの御前の花宴他力かも

開け放ち花宴ゆるされ本堂に

寺院を誘ひ庭刷く糸ざくら

はからずも甘酒馳走や花の寺

古民家

古民家や萱葺春気深々と

古民家やかすむ天井「には」三和土

邸ぬくし人も牛らもひとつ家

垂の門くぐり古民家春惜しむ

上屋梁丸太いかめし墨隴

むささびの忍ぶとふ古屋棟隴

豪商や絶えし切込接かすむ

豪商の邸の跡とや土筆原

春しやがむ転びしままの無縁墓

無縁なる武士の輪墓や影隴

いまは除け古民家鍛屋根隴

註1 他力：阿弥陀仏のお力・お慈悲

註2 には：ここでは建物の中の土間

註3 垂：しめなわ・玉ぐしなどにた

れさげる切折った紙

註4 とふ：といふ

註5 切込接：石垣の積様式の一つ。

垣面の仕上げ丁寧

註6 無縁なる：死後いまはとむらう

縁者のいない

註7 鍛屋根：屋根の椽下に接ぎたし

た小屋根（風雨や日除けがよい）

○五月例会安芸灘の下蒲刈島と

大崎下島を訪ねるに参加して

道中

万緑を従へ天守誇らしく

めづらしき若葉の城や鱗雲
 庄園や夏天くつきり水鏡
 船急ぐ青葉潮分け夕映えに
 揚船のスクリユー涼し夕づきて
 吃水線航く船探し青葉潮
 下蒲刈島

夏霞見えし小舟のいま失せつ
 潮の香ほのかに居き楼涼し
 万緑の懐浜の名邸に
 楼涼しもてなしお茶に瀬戸絶景
 若葉風通す高樓海絶景

若葉風匂ふ座敷に茶を啜る
 高樓の眼下大橋若葉の間
 若葉影映る飛石貴人口
 まぼろしの雁木や涼し仲仕達
 夏潮のひたひた雁木金波かな

船ゆゆるるリズムや青葉潮
 青葉嶺を背負ひ笑むごと島の里
 大崎下島

柑魂と彫り濃き大碑夏館
 急峻の青葉かき分けモノレール
 重伝建迎へ心のアイリス花
 伝承の井戸慕はしや夏落葉

みづくきの跡とや夏の遊女悲話
 芝居座の鏡板濃き青葉かな
 鳥若葉参道切られいまめかし
 沖絶景真向かひにして夏座敷

條約は知らずたわわやさくらんば
 店涼しおちよろを語る船大工
 夏の夕遊女の船の物語
 沖望む遊女の墓や夏の夕

夕涼し社に船主蝦夷地の名
 潮引きて浜藻累々干潟かな
 卯の花やさらばに偲ばん芭蕉塚
 葉桜や尾の上ぐ亀跡墓満舟寺
 夏霞潮騒日が高灯籠
 高灯籠夏霧霽るや遊女の名

註1 舟研：繋いである船が波で当つて起さる音ひびき
 註2 鏡板：舞台の背景に画いた板
 (基本的には能舞台)

註3 いまめかし：当世風だ
 註4 條約：長州軍と芸州軍がここ御手洗金子邸で結んだ倒幕の條約(御手洗条約とも)

註5 おちよろ：遊女をのせて沖舟に販ぎに行つたおちよろ舟の略
 註6 亀跡墓：霊亀を台座にした墓碑

事務局日誌

▽三月二十七日(土)泊旅行(奈良)説明会。参加者二十五名。

▽三月二十七日(土)古墳部会講座。参加者十一名。

▽三月三十一日(水)会計報告。
 ▽四月二日(金)役員会。出席者十四名。

▽四月三日(土)歴史研講座「重伝建を歩く」参加者十二名。

▽四月八日(木)会報一五三号発送二

五一通。

▽四月九日(金)中央公民館・福山市役所記者クラブへ会報一五三号配布。
 ▽四月十日(土)歴史研講座「古事記を読む」参加者二十二名。

▽四月十日(土)夕方花見会(福山城跡公園)参加者十一名。

▽四月十七日(土)城郭部講座「中世を読む」参加者十名。

▽四月十八日(日)バス例会「後鳥羽伝説紀行」参加者五十六名(一般十六名)

▽四月二十四日(土)古墳部会講座。参加者十二名。

▽四月二十六日(月)古墳めぐり五日道路通行届出。田口・篠原。

▽四月三十日(金)五月度役員会。出席者十七名。

▽五月一日(土)五月行事案内発送二二五通。

▽五月四日(火)ストックハウス一棟設置作業。参加者六名。

▽五月五日(祝)第二十八回親と子の古墳めぐり参加者七十五名。(一般四十四名)夕方打ち上げ慰労会。参加者十三名。

▽五月八日(土)歴史研講座「重伝建を歩く」参加者十四名。

▽五月九日(日)ストックハウスへ備品・書籍類の搬入。

▽五月十五日(土)城郭部講演会。参

加者七十名(一般四十名)

▽五月十六日(日)バス例会「御手洗町並探訪」参加者四十五名。

城郭研究会特別講演会第二弾！
 「備後古城記の虚実」

《日時》六月十九日(日)
 午後二時より

《場所》ふくやま市民交流館二階
 《講師》田口 義之会長

※駐車場は参画センター第二駐車場及び高野山別院駐車場をご利用下さい。

城郭研究会講座
 ★七月
 《日時》七月十七日(土)
 午後二時より

《場所》ふくやま市民交流館二階
 《講師》坂本敏夫 城郭副部長

《内容》「備後古城記壇上本」

★八月
 《日時》八月二十一日(土)
 午後二時より

《場所》市民参画センター
 《講師》坂本敏夫 城郭副部長

《内容》「備後古城記壇上本」

歴史研講座

「重伝建を歩く」

《日時》七月三日(土)

午後二時より

《場所》市民参画センター

《講師》種本 実 歴史研部会長

《内容》「山口県柳井市の町並みについて」

▼山口県柳井市にある「白壁の町なみ」は、瀬戸内海の商都として栄え「岩国藩のお納戸」とよばれるほど活気がある町でした。この町の歴史を学習します・どなたでも参加自由です。

お気軽にご参加ください。

古墳研究部会

「古墳講座」

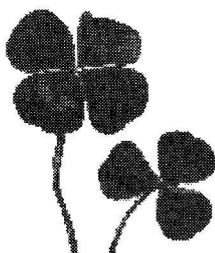
《日時》六月二十六日(土)

午後七時〜九時

《場所》福山市民参画センター

《内容》

「弥生時代のムラからクニへ」



備陽史探訪の会

創立三〇周年行事

①歴史講演会

(県立歴史博物館共催)

「史料で見る備後宮氏の盛衰」

《講師》田口 義之 会長

《日時》七月二十四日(土)

午後二時より

《場所》県立歴史博物館講堂

②創立三〇周年記念出版

「福山の遺跡一〇〇選」

福山市内の「遺跡」一〇〇箇所を紹介した「福山の遺跡一〇〇選」を出版する予定です。我々の会では今まで「探訪」シリーズを記念の節目ごとに出版してまいりました。今回はその集大成として、先人たちの歴史の「営み」である遺跡に焦点をあてて紹介する予定です。

ご期待ください！



③創立記念講演会

(県立歴史博物館共催)

「瀬戸内地方の後・終末期古墳」

―二子塚古墳をめぐる―

《講師》広瀬 和雄

(国立歴史民族博物館教授)

《日時》九月十八日(土)

午後二時より

《場所》県立歴史博物館講堂

※講演会終了後、アルセ(沖野上町)で祝賀会を開催します。

お知らせ

田口会長が福山の歴史について講演されます。どなたでも参加できますのでぜひお出かけください。

「福山のこと知っていますか？」

―福山 歴史の謎を解く―

《日時》六月十二日(土)

午後一時〜三時

《場所》盈進中学高等学校

《参加費》無料

《申し込み》

盈進中学高等学校へ電話またはHPから。

電話(084)955-2333

ホームページ www.eishin.ed.jp

新入会員の紹介

備陽史探訪の会へようこそ！

会員の皆様よろしくお願ひします。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

会報原稿募集中！

この会報は、会員のみなさまからの寄稿でできています。旅行に行つた、本を読んだ、散歩をしながらこんなことを考えた…なんでも結構です。気軽に原稿をお寄せください。原稿は、郵送かメールで事務局まで。

編集後記

創立三〇周年の記念行事も近づいてまいりました。みなさまぜひご参加ください！ (T)

備陽史探訪の会事務局 ☎セ〇〇八四
福山市多治米町五一十九ー八
☎〇八四(九五三)六一五七
URL <http://www3.plala.or.jp/big-eye/>
e-mail: b-tan-kaig@009191.com